清新二中だより

本校教育目標
１　豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
２　進んで学び、深く考える人（知性）
３　健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
４　責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
５　礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

コロナ禍の３年間　いつか財産に

校長　白　石　　亨

「学校を一斉休業とします」

一瞬、この言葉に我が耳を疑った。テレビからの声は安倍晋三首相だった。令和２年２月２７日の夕刻、当時の安倍首相が全国の小・中・高・特別支援学校に一斉休業を要請し、３月２日からの休業を伝えるニュースだった。あまりにも突然の臨時休業。しばらく思考が停止し、何にどう対処すべきか頭が真っ白になった。

この日以降、学校からは生徒の声が消え、授業、行事、部活動、給食、そして友達との語らいまで、すべてが奪われた。世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大は、世の中の姿を一変させてしまったのだ。

そう、この３月に卒業する３年生は、在籍の３年間、丸々コロナ禍の影響を受けたと言っても過言でない。今から３年前の小学校卒業式においては、突然の休業宣言を受け、本来の形での卒業式が行えなかった。さらに中学校では入学式の中止が発令され、その実施さえも叶わなかった。生徒本人は勿論のこと、保護者、地域の方々、教職員等、関係者の多くの人々がどれだけ暗澹（あんたん）たる思いを抱き、深く心を痛めたことか。

その翌年、自分は清新二中の校長として赴任する。３年生諸君は２年生に進級していた。

コロナ禍は２年目を迎えていたが、まだまだ制約が大きかった。２年生夏の林間学校は、当初、農家民泊を予定していたがコロナ禍が収まらず、お年寄りの多い農家から急きょ中止の要請を受けてしまう。代替として那須高原ペンションでの林間学校の実施にこぎつけたが、宿泊日数が２泊から１泊へと縮小を余儀なくされた。このような中でも当時の２年生諸君は腐らなかった。宿泊先のペンションを回ると仲間同士和気あいあいと楽しそうに活動に取り組んでいた。縮小されたことへの不満は噯（おくび）にも出さず、とびきりの笑顔を見せてくれた。

コロナ禍の制約は現在も続いている。給食は今でも黙食が続き静かな時間が流れる。冬場の教室は換気のために今年も窓や扉が閉められず、細長い四角い冷たい空気が流れ込んで生徒の指先の動きを鈍らせている。

しかし、３年間に及ぶコロナ禍の中でも、３年生はその折々に活躍し、清新二中の最高学年の力を遺憾なく発揮し、本校の教育活動を力強く牽引してくれた。特に３年生時の運動会ソーラン節、けやき祭クラス合唱はまばゆいばかりに光り輝いていた。圧倒的な存在感を示し、常に下級生をリードしてくれた。

３年生の強みは、何と言っても、仲間との絆（きずな）にあると強く確信している。

受験期においても仲間を思う優しい気持ちが溢れていた。都立高校の推薦受検の前日、受検する友達のために時間をさいて仲間が寄り添っていた。面接入試を受ける生徒を囲って、仲間の生徒が面接官役になり質問を投げかけていた。少しでも仲間のために役立とうと、最後の最後まで面接練習を繰り返していた。また授業においても同様である。わからない問題に対して、我（われ）関せずではなく、わかる生徒が時間をかけて丁寧に仲間に教えていた。もちろん、受験は個々の問題ではあるが団体戦の様相で挑んでくれていた。

３年間のコロナ禍で失ったものはあまりにも大きい。これ以上頑張れとは言い難い部分もある。

だが、コロナ禍だからこそ、学んだこと、得たことも大きかったと捉えたい。「日常の当たり前の大切さ」「できないことを恨むのではなく、できることに全力を尽くす大切さ」、そして「仲間との絆の大切さ」。コロナ禍という特別な３年間を経験したことで、人と人とのつながりが何にも増して大切であることに気付き、実感したに違いない。仲間との絆はずっと記憶の中で生き続けていく。このことが生涯の財産になると信じている。